

## 在るものと生きてゐるもの：論説

著者	三枝，博音
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 6
ページ	3 9 - 4 6
発行年	1918-03-31
その他の言語のタイトル	在るものと生きているもの：論説
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6782">http://hdl.handle.net/2298/6782</a>

## 在るものと生きてゐるもの

一三〇 三 枝 博 音

### 一

在るものと生きてゐるものと云つても無生物と生物そんな意味に云つてゐるのではない。物質と精神そんな區別をしたのではない。こゝに生きてゐると云ふのは動きのとれるもの延びてゆくものごんな象徴をとつて表はれるか分らないものを指すのである。

従つて在るものと言つたのは一定の型にはまつて動きのとれぬもの、すぐんだまゝであるものを云ふのである。實は純粹經驗の立場から言へば生きてゐないものはないのだ。唯人間が生きてゐるものを殺して在るものになしてゐるのである。而して此生きてゐるべきものが在るものになつてしまつてゐるのは不思議なことであり恐しいことなのである。或夏のこと瀬戸内海の或島の海水浴場で北陸生れの人から飛臺トビダイの上で次のやうな話を聞かされた。『此の内海のやうに波の静かな朝も晩も風ぎの續く海の邊に居ると壓へられたやうな憂鬱な氣分になる』これを聞いて私は不思議でならなかつた。此の晴れ切つた七月の青空のもとに島から眺めた中國山脈の巒はくつきりと鮮かに見えて海の水は紺青に澄み漣さへも立てゝゐない此海を眺めて憂鬱の氣分になるなどとは自分にはどうしても分らなかつた。然し北陸生れの其人が、『私の幼い時から知つてゐる海はこんな湖のやうな海ではない。絶えず動搖してゐる海そして時々怒り狂ふ海。晝見る眼には白い泡を岩角に飛ばしてゐる海。夜聞く耳には凄い遠鳴りを傳へる海なのだ』と言つた時に。かやうに動く海躍る海怒

る海こそ北陸の人には海と思はれそれに接すれば気分も引き立つのだらう。ちゝいとして白い細鱗一つ立てず風ぎ切つてゐる時の内海の水が憂鬱を感じしめると云ふことが自分には漸く分つた。動き騒いでゐると思ふ海が眠つたやうに横つてゐては其の人には不思議であらう。凄いに相違ない。それと同じ様に生きてゐるべきものが唯在るものになつたまゝでゐるのは凄いに恐ろしいことである。

## 二

有島武郎氏の『動かぬ時計』と云ふ小説に動かぬ時計のことが書いてある。其時計はフランスのブルボン王朝の榮華の盛りあの華麗の宮殿に置かれてあつたものである。其の時計の由來の文の一節をこゝに其儘拜借して見れば、『花のやうなその皇后と温厚なるルイ十六世とが濃やかな春をこめる睦言の間にその時計の精巧なる螺條ぜんまいはゆるゆるとほぐれ秒から分を刻み分から時を刻んで黄金の鈴かねを静かな夜の沈黙の中に穏やかに鳴り響かしたものだらう。』獅子の丸彫、唐草模様カサネの浮彫の施されてある長方形三段の角塊から成る臺の上に据ゑられてあつた此時計はギロチンの斧が皇后の頸に加へられた頃からどうしたのか動かなくなつたと云ふのである。そして其以後。如何なる熟達せる時計師の手に渡つても動きはじめなくて今は一つの裝飾品として残つてゐると云ふのである。雪白の指針盤の上に『ダマスクの七首を思はせる精鋼の指針は凝然として動かなくなつた。然し短針より一寸とをくれて十二時の少し手前を指してゐる長針を見てゐると澄み渡つた十二の音が時計の腹に仕掛けてある黄金の鈴から今にも凜々れん々と鳴り出しそうに思はれた。』

時計は動くものである。動かぬ時計は時計ではない。無價値な時計であり凄いやうな気分きぶんのする時計である。こゝに命のあるものをあげてこれと比べて見よう。吾々が若し野に出て芝草の上に積み重ねられた藁を

彈ねのけて見るの其の藁の下に日光を受けないために青白くなつてゐる草が日光を慕つて長く匍ひ延びてゐるのを見る。この草は在るのではない生きてゐるのである。壓へられた儘動かないのではない力に充ちてゐるのである。名もない一片の草であるが生きてゐればどうにか動く。獅子の丸彫も唐草模様の浮彫も黄金の鈴も動かぬものを動かす力にはならない。

然しよく考へて見ると實は時計の動かないのは不思議ではなかつた。時計の動くのは時計の腹に動くように『仕掛けてある』ためである。仕掛けたものゝ止るのは不思議はない。人間の作爲である。生きてゐる草が少しも延びなかつたらそれこそ恐しい。草を延びさすのは人間の作爲ではない。自然の生きた力である。若し動きのどれぬ一定の型に填まつた人間が居たらこれはご凄じことはまたとあるまい。

以上は生きてゐる筈のものが在るものになつてしまつたら不思議のことだと言つたまでである。それ以上の意味はない。吾々は生きてゐるものと在るものにもつと進んだ考案を續けて見よう。

### 三

これまでが生物これまでが無生物と判然と分けることはもう科學者もしない又なし得ない。こゝまでが物質こゝまでが精神と截然と分けることは哲學者ももう躊躇する。唯物質的なもの精神的なものと云ふに止るのである。然しそうは言ふても此處に持たれるペンもあればそれを動かす手もある。紙の上に投げ出された文字もあれば文字を書かした意識もある。そう勝手に粗笨な唯心論の刃で撫で切つて行かれてはたまらぬからもつと考へて見る。哲學者は物質とは感情の永續性だと説明する。自分のペンはかくくの形をなし色を呈して何時も存在すると同じ感覺が永續するものと吾々は思つてゐる。洋服のポケットをさぐれば今日見て

も明日見ても依然としてあの形のあの色のペンがあるものと思つてゐる。要するに同一の感覺が繰り返へされると思つてゐるのである。唯精神（意識）はそう凝然とおさまつてばかりはゐないと云ふまでである。文字でもそれである。列を描へて整列してゐる印刷された動かぬ文字も感情の永續性で説明が出来る。粗笨な唯心論はこゝを唯思はれるのである唯そう感じられるのだから三界唯一心と主觀的に片づけてしまふ。さううまくゆけば觀念は食ひ物にして行ける譯だがそうはゆかぬ。然しどうかすると此の文字が、列から離れて躍りはじめることがある。幼い子供が文字を見れば紙の上に黒い棒や點を見る。だが大人が詩文を耽讀してゐるときは活字は見えない。活字は透明になつて文字と視覺と心とは渾然として一つの働きをなして進んでゐる。古人が玲瓏明白自照靈然（レ）是色空未分境知何立（ナリ）とは恐らく此の意だらう。そこには物質と精神そんなものが對立する境地ではない。眞に色空未分である。それも必ずしも詩篇と人を要するのではない。いやなまじ人間がはさまつては渾然も玲瓏も娑婆をかくしてしまふ。

山の聳ゆる水の流るゝそれには善もない惡もない

若葉の萌ゆる鳥の唱ふそこには是もない非もない。本地の風光を示現して淡々焉として移りゆく一實在である。

この境界を詩人の唱ふ宗教宗の感得するにのみに委せずして現代の哲學者は或點まで明かにしようと思つてゐる。リッケルトはすべて科學者は物を見るに（思ふにも感ずるにも）三重の範疇によつてゐると云つてゐる所興性の範疇と時間空間及因果律の範疇と方法論的範疇とである。これは青いと云へば赤いのでもなく紫でもなく。青いと限つてもう個々の狀態に指定されたのである。それが時間空間、因果律の型にはまる

と此の青いキंक又はその青い紙とか何とか形体を備へ何處から如何して存在するのだと理屈がついて來るそれを更に取扱ひ易く方法論的形式の型に入れて漸く青きキंकなるものはと完全な概念が出來上つて科學上の知識となるのである。

そうして見れば直接に與へられたものの禪家の所謂本來の面目に三枚もヴェールを掛けてそれを事實だと騒いでゐるのである。蜘蛛の網にかゝつて幾重にもからまれた虫は蜘蛛の食するときにはもう虫の殻であると同じ。憊うなれば、正も出る邪も出る曲ものぞけば邪も頭を出す。色もあるが。空もある。物もあるが心もある。在るものと生きてゐるものとが嚴然として存する。然し若しこれらの範疇がはぎとられて一切が在るものでなくなり生きてゐるものと體驗し得るやうになつたら何と云ふ拾ひものであらう。其れこそ死なぬことである永遠の光輪に取り卷かれるのである。

#### 四

憊うしてみると私が生きてゐるものと言つたのは概念以前のものをさすのである。範疇に入る前のものを指したのである。混沌としたもの紛糾せるものを明かにして見るには規定を作り規範を設けて處理せざるを得ぬからだ。然しそれは唯かくするのが便利だからである。精力經濟を貴ぶ人間の生活には止むを得ぬのである。然しどうしても便利など云ふ巧利から割り出した人間の仕事である。概念も便利的にして出來たものである。反省を續け理智を働かしかくて人間は概念の構成に忙しい。人祖アダムが智慧の木の實を食して墮落した罪は人間は永遠に續けねばならぬ。

若しも一定の型にはまつたものをすべてと思ひそれより他に見ることも考へることも感ずることもないさせ

る人間が居たらそれは生きてゐる人間ではなくて唯在る人間である。其の人の生命の旅は墓穴を以て終點とする。其の人は處生の上には智に固り金に固り名に固り道徳に固り信仰に固りかくて動きはされぬ。かゝる人は常に青年の嘲笑の的になる。青年は時々型を破つては感激の天地に躍り出るものだからである。

在るものから解脱して生きてゐるものになる道に二つあると思ふ。宗教と藝術とがそれである。どちらかと云へば宗教は冥想の裡に型を破り、藝術は眼を見張り個々の自然のものに深刻な觀照を與へて型を破つて進む。宗教は冥目の藝術であり藝術は物象に執着する宗教である。だから思想よりは先づ感覺を貴ぶ現代人は宗教よりも藝術に走らうとする。勿論其の難易は分らぬ。いづれも無限の旅程を吾々に示してゐる。

今宗教から禪をとつてこれと藝術とが如何に在るものを生きてゐるものにするかを見たい。

## 五

道元の坐禪用心記にこんなことが書いてある『有<sup>リ</sup>寂靜無爲妙術<sup>ニ</sup>是<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>坐禪<sup>ト</sup>（中略）安<sup>ニ</sup>住<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>三昧<sup>ニ</sup>則<sup>ニ</sup>直<sup>ニ</sup>開<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup>良<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>佛道<sup>ノ</sup>正<sup>ノ</sup>門<sup>ヲ</sup>也<sup>ナ</sup>其<sup>ノ</sup>欲<sup>スル</sup>開<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup>者<sup>ヲ</sup>放<sup>シ</sup>捨<sup>シ</sup>雜知雜解<sup>ヲ</sup>拋<sup>シ</sup>下<sup>ニ</sup>世法佛法<sup>ヲ</sup>斷<sup>シ</sup>絶<sup>シ</sup>一切妄情<sup>ヲ</sup>現<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>眞<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>迷雲忽晴<sup>テ</sup>心月新明<sup>ナラン</sup>』

雜知雜解を放捨したところは反省や理智の霧消したところであつて差別や平等の區々たる分別の境ではない。先きの三重の範疇の破却である。世法佛法を拋下し去つたところには善もない惡もない。親鸞は「善も惜しからず惡も恐れなし」と云つた。一切妄情の雲散したところは憎や愛の執着は存しない。憎むべき賊もなければ愛すべき子もない。道元は此處を凡聖を超越し迷悟の論量を透過したのだと言つた。同じものを目ざして進むのだが藝術はこれと眞反對の進路を取る。自然の個々のものに恐しい執着を持つ。決して冥目はし

ない而も王侯の生活も乞食の生活も同じ程度に愛する。悪人の奥に潜める善の加能性を描き聖者を透して隠れたるその本能を描く。藝術家の前には一定の型にはまつたものは存しない。カーペンターは「吾等は一物を解すれば其れには生命と力のあるとを認めるが解することなければそれは粗悪な物質だと認める。一輪の花を見ればそこには己に微笑<sup>ほほえみ</sup>が見え人間の眼を見れば水晶の衣をまどうた智力が見える。岩石も其緻密な構造を顕微鏡で見たらば花の様にも見え水晶の様にも見え限りなく美しく表現の力が見える」と云つた。

肉眼で或距離を保つて見たものが一切のものゝ形と色とではない。人の眼に見え耳に聞えるものは人間の知覺に入るべく己に調理されたものゝみである、藝術家は型にはまつた習慣づけられた知覺の束縛から常に脱離する。かくして藝術家は物質をば表現の用に供する。物質を唯自己存在の目的にのみ用ふる。『風景畫家のコロオは樹木の頂きに平原の草に湖の鏡に播き散らされた善良を見。ミレーは其處に憐れと天命に譲ることを見た』とロダンは言つてゐる。

眞の執着眞の愛はかくして對象と、融合しなければ止まない。かくて藝術家は在るものと對立するのではなくて、これと融化し滲透し合つて生きたものになり渾然一如の生活に入るのである。

禪は峻嚴なる修練によりて本來の面目を體驗し得てよりは再び還つて自然界のものを愛する一木一草亦佛にあらざるはなしとし、狗子も亦佛性有りとする。彼等も亦あるものをば生けるものゝ表象<sup>シンガール</sup>として慕ひむ。

## 六

宗教と藝術と道は異つても生けるものに到達するに努めるのは一つである。かく云ふ意味の生けるものは、眞の生命であり力である。時空の束縛を離れて存する、その境にあることは永遠に死なぬことである。



永遠の光輪に取り捲かれたのではなくて何であらう。

人間が何でも言へば理屈である。殊に吾々が禪など、理屈を云へば、禪への冒瀆であると云はれるかも知れぬ。藝術を言へば未熟とせられるかも知れぬ。いづれ宗教と藝術とによつて生けるものを窺ふとしての吾々の努力は真相の埒外を馳せ廻はるに終るかも知れぬが。眞摯なる考察は體驗への一步であるには相違ないと思ひて敢て考察を試みたのである。(一九二八、三、十脱稿)